

2009年5月、「ちょっと変わった男女」が結婚式の相談にきました。男性は39歳、女性は26歳。年齢の差は別として、2人は「そんなことまで」と初対面の私が返答に困るようなことを、あっけらかんと話すのです。

女性の背丈は、1メートル40センチと低く、「少女時代から声変わりしていないのでは」と思うほど高い声で、それも明るく笑いながら話すのです。

男性は、早くに両親を亡くしたために、ひとり暮らしが長く、何でも自分ひとりでやってきたそうです。

初対面なのに意気投合した

私たちは、まだ正式に拳式の申し込みを交わしていないにもかかわらず、式次第から披露宴のことまで話をすすめました。

「私たちは、お見合いパーティーで知り合ったのです。会った瞬間から、私たちはお互いにこの人と決め新生活のことなど話し合ってきたの…

…実は、結婚式のことなのです。このことはまだ誰にも話していないのですが、身内の者だけでしたいのです。つまり小さな小さな結婚式を挙げたいのです」

「予算の関係などで身内の方だけを招く結婚式は、結構あります。ご心配なく」

「予算の関係もありますが、それが主たる理由ではないのです。私は、背が低いために小さいときからイジメにあってきました。学校時代の友だちはいないし、正規の就職ができずパ-

ートの職場なので結婚式に呼ぶような親しい人はいないのです」

結婚が決まっているとはいえ、彼女は相手のいる前で、私が返答に困るようなことを淡々と話すのです。

私がそっと男性の方に目をやると、彼はニコニコ笑いながら、

「彼女の言うとおりの結婚式をお願いします」と、頭を下げました。

翌週、2人は正式に申し込みにきて、その場で詳しい内

持病、イジメ、孤独を乗り越えて 結ばれた新郎新婦の笑顔に学ぶ

容の打ち合わせに入りました。

するとまた驚くことが彼女の口から出ました。

「私は1歳になる前に高熱が続いて、一度お医者さんに『ご臨終です』って言われたんですよ。一度あの世をのぞいて、戻ってきたんです……」

ここまで言って、彼女はわははと大きな声で笑い、

「それが原因で成長が遅くなり、みんなについていけなくなりました。実は、今も病気があって、いつ気を失うかわからないのです。だから、もし、拳式の最中に様子がおかしいと思ったら、急いで椅子を出しそこに座らせて下さい。早ければ1分、遅くても5分で意識が戻ります。それ

までは放っておいて下さい」
これまたびっくりです。彼は、まったく気にしない様子で、彼女に優しいまなざしを注ぎながら微笑んでいました。

式当日は、いつでも椅子が出せるように万全の態勢で臨み、介添人も彼女から眼を離しません。2人は、親族26名の皆さんに見守られながら、自分たちの言葉で誓いをしました。

シビルウエディング・ミニスターとして拳式を司る私

は、正面から2人を見守りながら、このような拳式に立ち会える喜びにひたっていました。

拳式は無事終わり、披露宴に移りました。ミニスターの役目を終えた私もその席に招かれました。

新郎のウエルカム・スピーチの後、両家の親族紹介が始まり新郎の親族は、「両親が早くに亡くなり、彼は寂しい日々を過ごしてきました。でも今日からは最高の伴侶を得て“家庭”を持ちます。そのことを親族は、心から喜んでいきます。ありがとう。お嫁さんになってくれて」とひとりひとりが新婦にお礼を述べました。

新婦側は、「一生治らない

病気を持っていることを承知で結婚してくださり、何とお礼を申し上げたらよいでしょう。ただただ感謝でございます」

こちらも親族のひとりひとりが新郎と彼の親族にお礼を言うのです。

結婚は、幸せになりたいと願ってするもの。しかし、こうして心から相手を幸せにしたいと思う気持ちとする結婚は素晴らしい。そう思うと同時に私は、ミニスターの役目を務めることで私自身が多くのことを学ぶことを知りました。

両家の親族全員がハンカチで目頭を押さえている中、2人は一度も涙を流すことなくニコニコ笑っていました。

そんな2人の姿が印象的でしたが、彼らにはこれがごく自然なことなのでしょう。



シビルウエディング・ミニスター
儀部英昭氏

(いそべ・ひであき。1958年広島県生まれ。2007年シビルウエディング・ミニスター資格取得)

▶親族を含め、「心から相手を幸せにしたい」と思う気持ちに感銘

